

芳賀の史跡めぐり

-6-

嶺小学校開校の地

「地元の人々に愛された学びの地」

明治維新後、新政府は明治五年八月に学制を頒布しました。この頒布から間もなく、明治七年一月十一日に、小暮、嶺、勝沢、皆沢新田の四か村連合で、この地に赤城小学校が開校されました。当時、全国で24,500校ほどの小学校が開校しましたが、その多くは民家やお寺などを利用した仮校舎でした。これに対し、嶺小学校は当初から独立した校舎が作られたのです。この地にいち早く学校が作られたのは、江戸時代から寺子屋で庶民教育が行われていたことなど、嶺町が教育に熱心であったことが理由の一つと考えられます。

開校当時の生徒数は60名ほどで、校舎は約180平方メートル（50坪）、敷地面積は約1,800平方メートル（1反8畝）でした。その後、学区の改正などにより赤城小学校は名称の変更や、芳賀小学校の分校になるなどの変遷がありました。明治二十五年十一月には芳賀小学校から再び独立し、嶺尋常小学校となりました。嶺小学校の生徒数は昭和二十一年頃で250人にも達しました。旧嶺小学校は多くの優秀な卒業生を輩出しましたが、昭和四十三年に金丸分校と併合し、請地地区に移転しました。しかし、請地に移った新しい嶺小学校も児童数が減少し、平成二十七年三月に閉校となったのです。なお、旧嶺小にあった石の門柱は請地の嶺小跡地に

に移設されています。

現在、嶺小学校開校の地には校舎は無くなりませんが、グラウンドは地域住民の運動場として利用され、子供たちの賑わいに代わり、運動に興じる大人たちの明るい歓声が響いています。また、小学校跡地の東側に大きな藤の木があります。明治三十年五月の新校舎の完成後、明治三十五年に青木平八郎氏より楠と共に寄付されたものです。現在楠は無くなりましたが、藤の木は嶺町自治会が中心になって大切に手入れされ、百年以上たった現在でも春になると見事な花を咲かせ、地域の人々の心を和ませています。

生涯学習奨励員

井上 金治



写真：児童数が多かった時期（昭和二十四年）のクラス写真・福嶋勝啓氏提供



位置図

5月の主な行事予定

5月12日（日）芳賀体協ソフトボール大会（芳賀公園）
5月18日（土）のびゆく子どものつどい・ふれあいの

広場（芳賀公園）

春夏秋冬

赤城山の覚満淵
覚満淵は大沼南東の駒ヶ岳と小地蔵岳に囲まれた低い所にあります。

尾瀬ヶ原のような高層湿原で、低温のためミズゴケなどの植物が分解されずに堆積し、高層湿原を形成する途中にあるといわれています。ニッコウキスゲ、モウセンゴケなどの湿原特有の植物がみられます。

日光まで森林が繋がっているため、鹿の数が増加しており、覚満淵では花の食害が増えておられます。そこで、防護ネットの柵を設置して鹿が近づけないような対策をとっています。

覚満淵という名前は、南北朝時代に編まれた神道集に、比叡山延暦寺の高僧の覚満和尚が平安時代、ここで法会を行ったことの記載があり、これが由来となり、覚満淵と呼ぶようになりました。

加藤 正利